

ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方：
静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握
を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 朱音 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007377

ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方 — 静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握を通して —

山崎朱音*

The Way of Practical Dance Skill Training for Dance Classes

: Understanding the present circumstances of dance classes

from junior high school P.E. teachers of Shizuoka

Akane YAMAZAKI*

Abstract

The purpose of this study was to understand the present circumstances of dance classes in junior high school in Shizuoka, and to suggest that the way of practical dance skill training to junior high school P.E. teachers. To accomplish this, a questionnaire survey was conducted on junior high school P.E. teacher of Shizuoka. As the results, they have following three anxieties for dance classes: “lack of dance skills”, “deficient knowledge of teaching methods” and “demand for interesting for students to dance”. And it was clarified that there was a difference between course content and understanding characteristic of dance styles. Therefore, it can be considered that it is necessary to train practical dance skill for teaching dance classes for following three points, that is 1) to ensure that teachers experience dancing sufficiently, 2) to present specific teaching method, 3) to present the contents which give teachers a understanding of characteristic of dance styles.

キーワード：ダンス授業 必修化 ダンス領域・種目の特性 実技研修

1. 緒言

平成 24 年度より、中学校において平成 20 年告示の新中学校学習指導要領（以下、平成 20 年学習指導要領とする）が完全実施となった。今回の改訂において体育科・保健体育科では、小学校から高等学校までの発達の段階¹⁾を踏まえた、各運動領域の指導内容の明確化と系統性が重視された（白旗, 2011）。また、中学校 1・2 年生では、武道とダンスを含めた全運動領域が必修になった。

平成 20 年学習指導要領では、ダンス領域の指導内容として、「感じを込めて踊ったりみんなで踊ったりする楽しさや喜びを味わい、イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流ができるようにする」（文部科学省, 2008）ことを掲げている。またダンス領域の種目は、「創作ダンス」「フォークダンス」、そして平成 10 年の改訂により導入された「現代的なリズムのダンス」の 3 つの種目で構成されている。

ダンス領域の必修化を受け、中村（2009）は、学習指導要領の移行期²⁾に、東京都の中学校教員を対象にしたダンス授業の実態調査を行っている。中村（2009）によれば、ダンスの実実施計画率は、平成 24 年度に向けて年々増加していることが明らかにされた。特に、男子の実実施率は、10%から 80%に推移するこ

と、さらにダンス担当教員のうち男性教員が占める割合が 10%から 55%まで増加する見込みも示された。平成元年改訂の学習指導要領により、ダンスは男女共修になったが、中村の示した結果は、男女共修といっても武道との抱き合わせによる選択履修であったことを示唆している（中村, 2012）。つまり、今回の改訂によって、男女ともにダンス授業を実施する機会が保障されたといえる。また、これと同時に、男性教員を含めた全ての教員が、ダンス授業を実施するための指導力³⁾を備えることが求められている。

一方で静岡県内に目を向けると、これまでの研究からは静岡県内のダンス授業の実態に関する報告は見当たらない。今後、静岡県内を網羅したダンス授業の実態調査を行うためには、そのための基礎資料を得ることが急務である。また、平成 20 年度学習指導要領が完全実施された今、教員自身のダンスに対する意識や指導法等、ダンス授業を実施するための指導力を向上させる教員のための研修の機会の設定が必要であると考える。

そこで本研究は、静岡県内の中学校教員を対象に、ダンス授業の実実施状況に関する質問紙調査を実施し、平成 20 年学習指導要領の実実施年度のダンス授業の実態を把握するとともに、ダンス授業実施を支援し教員の学びの場となる実技研修の在り方・方向性を提案することを目的とする。

* 静岡大学教育学部

II. ダンス領域・各種目の特性とその解釈

中村(2009)の研究では、ダンス領域の中で、授業で実施する予定の種目についても調査した。その結果、実施予定種目は、現代的なリズムのダンスが最も多く、次いで男子はフォークダンス、女子は創作ダンスが挙げられており、フォークダンスは男女共習での採択率が高いことを指摘している(中村, 2009)。

しかし、この研究結果は、東京都に限定された結果ではない。中村の研究に続き、成瀬・寺山(2011)はA県の高等学校でのダンス授業の実態を調査した。その結果からも、実施種目は、現代的なリズムのダンス、次いで創作ダンスの順に採択されていた。さらに成瀬・寺山(2011)は、各種目の授業内容に着目し、現代的なリズムのダンスの授業内容ではエアロビクスの実施、創作ダンスにおいては作品創作のみの実施が多いことを明らかにし、教員の各種目の特性の理解不足を指摘している。中村と成瀬・寺山の研究は、対象が中学校の教員と高等学校の教員のため校種の違いはある。しかし、ダンス領域の指導内容は、発達の段階に応じた発展はあるが、ダンス領域の特性自体には中学校と高等学校で相違はない^{註4)}。そのため、「教員の種目の特性の理解不足」という成瀬・寺山の指摘は、双方の校種の教員にいえることだと推察される。

ダンス領域を構成する3種目、創作ダンス・フォークダンス・現代的なリズムのダンスの特性を、村田(2009)は次のように示している。

- ・創作ダンス：表したいイメージや思いを自由に動きを工夫して踊り表現する
- ・フォークダンス：日本や外国の伝承された踊りを身につけてみんなで一緒に踊って交流する
- ・現代的なリズムのダンス：ロックやヒップホップなどの現代的なリズムにのって自由に友達と関わって踊る

創作ダンスは、「テーマや題材のイメージ」を「即興的な表現」と「簡単な作品創作」で表現する。これらは個別化・多様化するため、創造的な学習が進められることが特徴である(村田・高橋, 2009a)。現代的なリズムのダンスは、リズムのとり方や動きを工夫したり、相手と自由に関わり合い感じ合って踊るのが楽しいダンスである。また指導の際には、既存の振付などを模倣することに重点があるのではなく、変化とまとまりを付けて、全身で自由に続けて踊ることを強調することが大切である(村田・高橋, 2009b)。またフォークダンスのねらいは、踊り方の特徴をとらえ、音楽に合わせて特徴的なステップと組み方で仲間と楽しく踊ることにある(村田・高橋, 2009c)。

つまり、創作ダンス・現代的なリズムのダンスとフォークダンスには異なった特性がある。創作ダンスは「イメージ」を、現代的なリズムのダンスは「リズム」を手がかりにした、ともに「自由」なダンスであ

る。一方でフォークダンスは、日本・世界の伝承された踊りを身につけるのである。ダンス授業を実施する教員は、これらの3種目の特性を区別し、その特性を生かした授業を実施することが必要であると考えられる。

また下村ほか(2012)は、自らの授業実践の反省から、ダンス領域、そして各種目の特性理解の重要性について言及している。領域の特性理解については、特に、ダンス領域と体づくり運動との違いを挙げた。例えば、成瀬・寺山(2011)の研究でも挙げられた、現代的なリズムのダンスの授業で扱うエアロビクスの授業である。エアロビクスは、準備運動や補強的な運動刺激のひとつとしてとらえた場合、ダンス領域の持つ創造的な学びは生まれにくい。つまり、ダンス領域ではなく体づくり運動として扱われるべきである(中村, 2005)。エアロビクスの「リズムに合わせて運動する」ことが、現代的なリズムのダンスの「リズムに乗る」と混同される例もみられるが、双方の特性を理解することで全く異なった領域であることが理解される。また下村ほか(2012)は、アイドルグループのプロモーションビデオを基にした授業実践について、授業後の反省に「生徒がビデオ映像から学んだ動きを技能として評価することがダンス授業といえるのか」という問題を提起し、現代的なリズムのダンスの「リズムに乗る」という特性を明確にし、授業実践に繋げることの必要性を指摘している。

一方で、現職教員のダンス授業への指導の困難さを解消するには、ダンス授業で「何を教えるのか」という、学習内容の明確化が必要である(寺山, 2007)。平成20年学習指導要領によって学習内容の明確化が行われたが、いわばこれらの理論が授業実践にどのように繋がっていくのかを、ダンス授業を実施する教員へ伝えることが、ダンス領域・各種目の特性を理解したダンス授業実践への一助になると考える。

III. 静岡県中学校教員の実態の把握

1. 方法

1) 調査対象・期間

2012年7月から8月にかけて静岡県内で実施されたダンス実技研修会に参加した、静岡県の中学校保健体育科教員38名(男性教員25名、女性教員13名)を対象とした。対象者の参加したダンス実技研修会は、表1に示した3つの研修会であり、対象の教員はそのうち1つの研修会に参加している。なお、本研究の対象者は、実技研修会へ参加する意欲の高い教員である。このことにより、今後予定している静岡県内の中学校教員に対するダンス授業の実態調査の基礎資料を作成できると考える。

2) 調査項目

調査項目は、中村（2009）、成瀬・寺山（2011）の研究を基に、筆者が作成した。項目の詳細は、表2の通りである。なお、実施もしくは実施を予定している種目とは別に、取り扱いたい種目を尋ねる項目を設定したのは、回答者が生徒に各種目のどういった特性を学ばせたいと考えているのか、また実施している種目と比較することで、回答者の意思で実施種目を選択しているのかを明らかにするためである。

3) 分析方法

本研究では、欠損値のある回答は省き、回答総数を有効回答として分析対象とした。なお、所属校のダンス授業の実施状況については、所属校が同一の回答者が複数名いた場合は、1つの回答として扱った。自由記述で得た回答は、同じ意味の内容をまとめ、カテゴリーを作成した。

2. 結果及び考察

1) 回答者特性

回答者の特性を、表3に示した。

回答者は、65%が男性教員（平均年齢 33±10.1歳）、34%が女性教員（平研年齢 32.8±9.8歳）であった。教員歴は、男性教員の教員歴は平均 8.8年（±10.6）、女性教員が平均 10年（±9.3）である。

ダンス指導経験平均年数は、男性教員 2.2年（±3.2）、女性教員 6年（±8.8）であり、女性教員の指導が多いことが明らかである。その内、ダンス指導経験が全くないと答えたのは、男性教員が回答者 23名中 6名（25%）、女性教員が回答者 11名中 1名（9%）であり、この結果からも、女性教員のほうが教職に就いた後、ダンス指導を担当する機会が多いことが明らかになった。この結果は、中村（2009）の研究

結果と同様の傾向を示している。

さらに教職に就く前のダンス履修経験があると回答したのは、男性教員は回答者 25名中 13名（52%）、女性教員は回答者 12名中 10名（83%）であり、女性のほうが自身のダンス経験をもとに、授業を展開していることが推察される。

また、ダンス授業を実施するにあたり不安に感じる点を、自由記述により回答を得た。得られた記述は、共通する内容ごとに分類し、表4にまとめた。表4の（）には記述数を示したが、今回はこの結果から量的な考察は試みないため、参考程度に留める。

回答した教員がダンス授業の実施で不安だと感じている点を大別すると、「指導者」「生徒」「指導方法」に分類できる。

細かくみていくと、「指導者」には「実技力の不足」と「苦手意識」が挙げられた。「実技力の不足」は、分類した記述数が最も多く、教員のもつ不安要素が、自分自身の実技力にあることが明らかになった。記述の中でも「自分自身が授業を受けたことがないので、ポイントやねらいをどう授業で捉えればいいのかわからない」からは、教員自身のダンス履修経験が実技力を左右していることが示唆される。特に男性の場合、48%が履修経験がないことから、教員自身がダンスを経験する場の必要性があると考えられる。

さらに「生徒」には「生徒の興味」「男女共習」が挙げられた。分類した中でも、「生徒の興味」に分類した記述は全体の中でも2番目に多い。このことは、教員自身の実技力や経験不足への不安が、生徒の気持ちを授業へ惹きつけられるかといった不安と関連することが推察される。また、「子どもたちはダンスの授業＝現代的なリズムのダンスというイメージを持っている」という記述からは、教員が子どものニーズに合わせた授業展開を考慮していると考えられる。

表1 対象者が参加した実技研修会

日	研修会名	主催
2012年7月27日	2012年度公開講座	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
2012年8月6日	平成24年度駿東地区保健体育実技研修会	(社)駿東地区教育協会
2012年8月17日	平成24年度教員免許状更新講習	静岡大学

表2 調査項目

項目	調査内容
基礎調査	性別、年齢、教員年数、ダンス授業指導経験年数、ダンス履修経験 ダンス授業を実施するにあたり不安に感じる点
ダンス授業の 実施状況	所属校について (1)年間計画の有無、必修・選択の別 (2)実施種目の内訳
	個人について (1)実施状況 (2)実施種目の内訳 (3)取り扱いたい種目

表3 回答者特性

性別	回答者数 (人)	平均年齢 (歳)	平均教員年数 (年)	ダンス指導経験 平均年数(年)	履修経験 (%)
男性	25	33.0 ±10.1	8.8 ±10.6	2.2 ±3.2	52
女性	13	32.8 ±9.8	10 ±9.3	6.0 ±8.8	83
計	38	32.9 ±9.9	9.2 ±10.1	3.8 ±8.8	—

表4 ダンス授業を実施するにあたり不安に感じる点

指導者(12)	
実技力の不足(8)	<ul style="list-style-type: none"> ・技術的な指導力不足 ・現代的なリズムのダンスは、専門的なステップが教えられるか(子どもの方が上手い) ・教員が技術・知識を習得しきれていない ・自分自身が授業を受けたことがないので、ポイントやねらいをどう授業で捉えればいいのかわからない ・自分自身があまり経験がないため、ポイントとなる部分がわからない ・ダンスの動きを自分があまり知らない ・ネタがない ・生徒たちが自主的に取り組んでいるうちはいいが、「何が参考になる振付やステップを教えてください」と聞かれたときに困る
苦手意識(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の苦手意識 ・それ以前に自分がどれだけ本気になれるか ・自分が苦手なのでステップなどの見本がみせられない ・自分ができない
生徒(10)	
生徒の興味(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒全員が興味を持って実施することができるか(4) ・子どもたちはダンスの授業=現代的なリズムのダンスというイメージをもっているため、創作ダンスとのギャップがあるように感じる ・いかに子どもを本気にさせるか
男女共習(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・男女共習のため、異性に動きを見られるのを嫌う ・思春期なので男女のコミュニケーションをどうとらせるか
指導方法(18)	
授業の展開の仕方(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちが行き詰ったときの手立て ・授業の進め方、基本的な知識など、自分自身があまり経験がないため不安 ・具体的な指導方法 ・全員が行える雰囲気づくり ・授業展開の仕方(2)
評価(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・技能面の評価が難しい(3) ・生徒がからだを大きく動かしているかどうか
生徒への働きかけ(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンスを苦手とする子への働きかけ ・男女共習でどこまで求められるのか ・しっかり取り組むことができない子どもへの対応
発表会等の見せ合い(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・発表会や学び合いの設定(2)
選曲(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽・映像の選択
導入(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・導入の仕方

つまり、教員にとって自らが受講生となってダンスを踊る経験のできる実技研修の機会の提供が、教員自身の実技能力が向上、それに伴って指導方法に対するイメージが拡大し、その先にダンス授業の指導力向上に繋がること示唆される。

「指導方法」には、「授業の展開の仕方」「評価」「生徒への働きかけ」「発表会等の見せ合い」「選曲」「導入」が挙げられた。この結果は、先の分類結果とも合わせると、教員自身が学生時代に履修経験がなくダンスの基本的な動きができないことが、指導に際して必要な学習内容や指導方法、そして評価について困惑を招く要因になりうるという指摘(高橋, 2012)に該当する。また、運動経験が生徒の動きみる

ことにも繋がる(吉田, 2008)ことから、いかに教員自らが踊ること、またダンスを指導することが重要になると考える。

2) 回答者所属校におけるダンス授業の実施状況

(1) 体育年間計画へのダンス領域の配分

体育年間計画の中にダンス領域が配分しているかについて、配分していると回答した教員は回答者中100%であった(表5)。また、配分の状況は、100%が必修であり、ダンス領域を他領域との選択として配分している学校はみられなかった。このことから、本調査に回答した全ての中学校では、男女ともにダンスが必修領域として年間計画に配当されていることが確

認められた(表6)。

(2) 実施種目の内訳

ダンス領域の中で、授業での実施種目の内訳について回答を得た(表7)。

その結果、授業で実施している種目として、創作ダンスと現代的なリズムのダンスがともに38%と、この2領域がほぼ同じ確率で採択されていることが明らかになった。次いで、その他のダンス(地域の伝統舞踊など)が15%、フォークダンスが9%の実施率であった。この結果は、先行の中村(2009)と成瀬・寺山(2011)の研究と同じ結果が得られており、静岡県でも他県と同様の傾向が把握できた。

特に、3つの種目で比較すると、創作ダンス・現代的なリズムのダンスの実施率の高さがうかがえる。また、その他のダンスには、ソーラン節を挙げている回答者が3名いた。

3) 教員のダンス授業の実施状況

(1) 教員個人の実施状況

対象の教員の所属校では、全ての学校でダンス領域が必修として配分されていた。しかし、その内、平成24年度にダンスの授業を実施している、もしくはする予定であると回答した教員は92%であった(表8)。実施しない理由には、「体育祭でソーラン節を行っている」「前任者が実施していなかった」「自身が苦手」が挙げられた。

表5 年間計画中の配分

n=30	
年間計画中の配分	実施数(実施率)
配分されている	30(100%)
配分されていない	0

表6 配分の状況

n=29	
配分の状況	配分数(配分率)
必修	29(100%)
選択	0

表7 所属校における実施種目の内訳

実施種目	実施数(実施率)
創作ダンス	17(38%)
フォークダンス	4(9%)
現代的なリズムのダンス	17(38%)
その他	6(15%)
計	44

(2) 実施種目の内訳

実施種目の内訳について、自由記述で回答を得た。記述内容を、創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズム、その他のダンスの4つに区分し、表9と図1に示した。

その結果、創作ダンスが39%、フォークダンスが12%、現代的なリズムのダンスが39%、その他のダンスが10%であった。その他のダンスには、得られた回答のうち3回答がソーラン節をダンスの授業内容として扱い、残りの回答では「選曲した曲に振り付けをして集団で踊る」ことが挙げられた。しかしながら、ソーラン節は、授業者の教材の特性の理解次第ではダンス領域ではなく体づくり運動の領域で取り扱われる内容になりうる(下村ほか, 2012)ため、ダンス授業の実施として扱われるかは危惧されるところである。また、「曲に振り付けをして踊る」という授業内容についても、「自由に踊る」というダンスの特性とは異なった内容だといえる。一方で、現代的なリズムのダンスに含んだ自由記述の中にも「基本ステップ」を授業内容に挙げている記述もあり、「自由なダンス」と「型の決まったダンス」の違いがなにか、といった現代的なリズムのダンスそのものの特性の理解に、不十分さが垣間見える結果となった。

さらに、実施種目の回答のうち、22%が行事(体育祭や宿泊学習)のためにダンス領域を配分していることが明らかになった。自由記述には、「体育祭に向けて」「体育祭の表現としてソーラン節を行う」「キャンプで実施するためにフォークダンスを行う」など、行事の練習のためにダンス領域が実施されていた。これらの記述からは、ダンス授業で生徒が創作した作品を発表する場として行事を設定している、もしくは、行事で発表するためにその練習時間をダンス授業として配分している、言い換えれば行事の準備としてダンス授業が配分されているという、2つのダンス授業の配置理由が推察される。

表8 教員個人における実施状況

n=37	
実施状況	実施数(実施率)
実施している	34(92%)
実施していない	3(8%)

表9 教員個人における実施種目の内訳

実施種目	実施数(実施率)
創作ダンス	16(39%)
フォークダンス	5(12%)
現代的なリズムのダンス	16(39%)
その他(ソーラン節など)	4(10%)
計	41

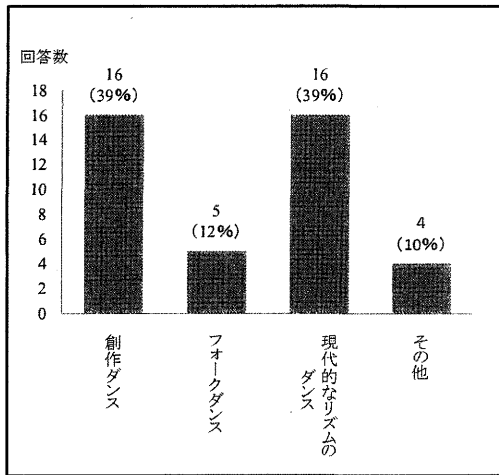


図1 教員個人における実施種目の内訳

また、所属校における実施種目の内訳（表7）と教員個人における実施種目の内訳（表9）は、その実施種目の内訳に類似した結果が現れた。このことは、教員が実施している種目が、所属校からの要望（他の教員との関係や学校行事との関係等）に応えた種目を選択しているのか、または教員自らの意思で種目を選択しているのか、その種目選択の仕方に疑問が生じる。ダンス領域の3つの種目から教員が自由に選択した種目を実施する場合と所属校の要望に応じて種目を選択する場合とでは、ダンス授業への取り組みや教員の意識に違いが現れることが推察される。

(3) 取り扱いたい種目

現在授業で実施している種目とは別に、今後、ダンス領域の中で授業で取り扱いたい種目について回答を得た（表10、図2）。

その結果、創作ダンスが49%、フォークダンスが10%、現代的なリズムのダンスが38%、その他のダンスが3%と、創作ダンスが最も高い回答率であった。先の所属校・教員個人の実施種目の回答（表7・9）と比較すると、創作ダンスは、実際に実施されているよりも多くの教員が実際に取り扱いたい種目としていえることがわかる。代わりに、その他のダンスの実施率が10%であるのに対し、取り扱いたい種目としては3%にとどまっている。つまり、教員の中には、創作ダンスを授業種目として扱いたいが、所属校からの要望などの理由により、その他のダンスを選択して実施していることが推察される。

また、回答した理由を、共通する内容ごとに分類し、表11にまとめた。表11の（）には記述数を示したが、今回はこの結果から量的な考察は試みないため参考程度に留める。

表10 授業で取り扱いたい種目

取り扱いたい種目	回答数(率)
創作ダンス	19(49%)
フォークダンス	4(10%)
現代的なリズムのダンス	15(38%)
その他	1(3%)

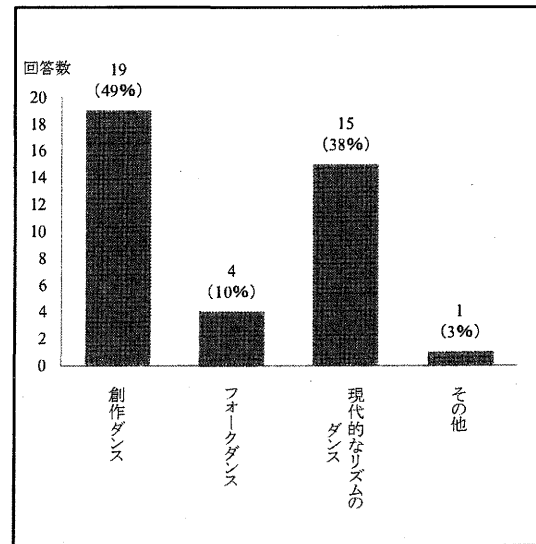


図2 授業で取り扱いたい種目

①創作ダンス

創作ダンスと回答した理由は、「表現」「創作」「自由」「コミュニケーション」の4つに大別できた。「表現」に分類した記述からは、「自分を表現することが苦手な生徒が多い」という生徒の現状に対し、創作ダンスの「表したい思いを自由に表して踊る」という特性を踏まえた、教員の「自分の考えを体で表現する力を身につけてほしい」といった願いが込められていることが推察される。さらに、「創作」に分類した「表現したい動きを自分で作ることに楽しさを感じる」のように、教員自らの創作ダンスに対するイメージや経験が、実施の原動力になることも示唆される。また、「自由」に分類された記述があることから、創作ダンスが他種目に対し、「自由なダンス」とであるという解釈がうかがえる。また、「コミュニケーション」に分類した記述からは、仲間との「関わり合いが多い」という、作品創作過程に着目している記述もあった。

②フォークダンス

フォークダンスと回答した理由は、共通して「コミュニケーション」にまとめられる。記述からは、フォークダンスを通し、男女・仲間同士が「交流」「協力」することができることが挙げられた。創作ダンスを挙げた理由の中にも「コミュニ

ケーション」に分類した回答があったが、男女の性差を意識する回答はないことから、フォークダンスが性差の意識や抵抗が少ないという解釈から、授業で取り扱われている可能性が推察できる。

また記述には、フォークダンスの「日本や外国の伝承された踊りを身につける」というフォークダンスの特性については触れられていない。このことから、回答した教員は、伝統文化の継承という特性よりも、活動を通じた人間関係の形成に目を向けていることが推察される。

③現代的なリズムのダンス

現代的なリズムのダンスと回答した理由は、「リズム」「生徒の興味・関心」の2つに分けられた。

回答理由にある「音楽に合わせて体を動かす楽しみを味わうことができる」ことは、現代的なリズムのダンスの「リズムに乗って自由に踊る」(村田, 2009)という特性を解釈していることがうかがえる。さらに、「(生徒にとって)最も身近であり、興味づけしやすい」「生徒たちのニーズに応えられるようにしたい」という、生徒の興味・関心を重視し、現代的なリズムのダンスを取り扱っていると考えられる。このことは、ダンス授業を実施するにあたって不安な点(表4)にも挙げられた「生徒の興味」への不安点と関連させると、教員の生徒のニーズに応えたいという思いが、教員自身の指導の不安を助長していることが推察される。

4) 今後の実態調査に向けて

以上の静岡県中学校教員の実態の把握から、今後静岡県内で実態調査を行うために、以下の3点について検討し、調査する必要がある。

- ①本研究により、ダンス領域として扱われているソーラン節や「型の決まったダンス」とは、ダンス領域、もしくは3つの種目の特性と合致しない現状が見えた。そのため、各種目での授業内容に踏み込んで調査を行うことで、教員のダンス領域・各種目の特性理解と実際の授業内容との相違がより明らかになると推察される。
- ②行事としてダンス授業を配分していることについて、より詳細な調査が必要である。なぜならば、行事の準備としてダンス授業が配分されているのか否かを明らかにすることで、教員のダンス領域・各種目の特性理解に加え、学校の実態(時間数や他領域との配分等)の把握に繋がると考える。
- ③教員が取り扱いたい種目と、所属校・教員個人が実施している種目を比較し、なぜ取り組みたい種目を実施することができないのか、その要因を検討する必要がある。この導き出した要因には、教員の指導上の悩みや不安な点が反映されていると推測され、またそれらの解決策を研修等の機会を通じて提案することができると思う。さらに、教員が望む種目を実施することは、ダンス授業の質の向上にも繋がることが期待される。

表 11 取扱いたい種目を挙げた理由

創作ダンス	
表現(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・表現する基本は創作である ・表現という意味では創作が一番 ・自分の考えを体で表現する力を身につけてほしい ・自分自身で考えたイメージを体を使って表現できるので、子どもが上手い下手を気にせず全身を使ってできる ・自分を表現することが苦手な生徒が多い
創作(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・自らが作ってダンスをする方が積極的になる ・創作する楽しさからダンスの楽しさを学んでほしい ・表現したい動きを自分で作ることに楽しさを感じるため ・動作を考えて創るため
自由(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・より自由度が高い ・子どもの「自由」が多い
コミュニケーション(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション力の育成の面からみても表現活動はとて有効であり、仲間との関わりが工夫できる教材である ・関わり合いが多い
フォークダンス	
コミュニケーション(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・男女共修で授業を行っているため、男女間の交流にも繋がる ・男女や友人で協力してできる
現代的なリズムのダンス	
生徒の興味(7)	<ul style="list-style-type: none"> ・最も身近であり、興味づけしやすい ・生徒たちのニーズに応えられるようにしたい ・刀がいいために、生徒も入りやすい ・最も子どもが生き生きすると思われる ・TV等も含め、生徒の生活に近いものであり、今後も広がりがあがる ・子どもが意欲的に学ぶことができる ・時代にあっている
リズムと動き(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に合わせて体を動かす楽しみを味わうことができる ・リズムに合わせて体を動かす力は、他の領域とも関係が強いと ・一番子どもたちが体を動かしやすい ・リズムダンスが身につけば、いろいろな動きに繋がる ・リズムに合わせて体を動かしやすい

IV. 研修機会の在り方・方向性

本研究の結果より、今後ダンス実技の研修会の機会をどのように設定するべきかを考察する。

教員のダンス授業を実施するにあたり、履修経験不足から、自身の実技力への不安を多く抱いていた。これに伴い、具体的な指導のイメージがつかめず、目の前の生徒の動きへの評価、授業の展開の仕方などへ不安を感じていることが明らかになった。

このような状況に対し、実技研修はどのような役割を担うべきなのか。第一には、教員にダンスを踊る機会を提供することにある。自身が踊って「楽しかった」という感想は、ダンス領域の特性を理解しそれを生徒に教えるためには必要不可欠である。しかしながら、そこでとどまっては授業実施へと繋げていくことは難しいのではないだろうか。つまり、教員自身の技術の向上に加え、それを指導するための指導方法を、実技研修の場では伝達しなくてはならない。

さらに、ダンス領域・各種目の特性の理解を教員が正確にするよう、促すことも必要であることも明らかである。先行研究はもとより、本研究においてもダンス領域・各種目の特性理解と実施内容のねらいに相違がある例が挙げられた。このねじれた現象を解決するためにも、ダンス領域・各種目の特性の理解を、実技研修を通して、教員自身の体で体感するような機会が必要である。

また、「教える－教わる」の立場、言い換えれば模擬授業形式のような研修の機会を設けたい。研修の機会がただの受け身ではなく、能動的な活動を仕込むことで、さらなる指導方法のイメージが広がるのではないか。事例に、岐阜県で実施された研修を挙げる。熊谷（2007）により実施された研修は5日間にわたる。1日目の午前に実技研修、午後に問題意識に基づく議論を行い、2から4日目に勤務校での授業実践、5日目に実践報告を行った。このような実技研修と授業実践が融合した研修は、自身のダンスを踊った経験と指導法が連結できる。

一方、中村（2009）によれば、実技研修が実施していないもしくは不十分である理由に、教員の多忙や研修内容の提供が十分でないことが挙げられている。つまり、研修内容の充実化を図りながらも、いかに効率よい研修の場を提供できるかを考えていかななくてはならない。平成20年学習指導要領によって学習内容の明確化が行われ、現在は文部科学省によって、ダンス指導のためのリーフレットが発刊された（文部科学省、2011）。そして今後は、『学校体育実技指導資料第9集－表現運動系及びダンス－』が発刊される。これらの資料も有効に活用することも、その方法の一つであると考えられる。

ダンスの授業は、学習をスタートさせる共通の手がかりがあり、正解は一つではないが確実に良い動きが

ある（村田、2012）。その良い動きが何かを、教員の実技研修の場で、そして教員自らの体験を通して共有することが、今後のダンス授業の実践に繋がっていくと考える。

注

注1) 体育科・保健体育科では、小学校から高等学校までの12年間を見通し、「各種の運動の基礎を培う時期」「多くの領域の学習を経験する時期」「卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるような時期」といった、発達の段階のまとまりを踏まえ、指導内容を明確化・体系化した（佐藤、2009）。

注2) 中村（2009）は、平成20年学習指導要領の告示直後である平成19年3月と平成21年度の2度にわたり調査を実施した。平成19年には、平成20年学習指導要領告示前後のダンス授業計画の実態について、平成21年には、平成20・21年度のダンス授業計画の実態及び平成24年度（平成20年学習指導要領完全実施年度）のダンス授業計画（予想）を調査した。

注3) ダンス授業で求められる教員の指導力には、①ダンスの思想（考え方・理論）を持つこと、②ダンスの授業をデザインすること、③学習の場や踊る環境を演出する力を磨くこと、④実際の学習者のやり取りで発揮する指導力を磨くこと、⑤授業を評価することが挙げられる（村田、2009）。

注4) 平成21年告示高等学校学習指導要領（2009）では、ダンス領域について、中学校までの学びに加え、「感じを込めて踊ったり、仲間と自由に踊ったりする楽しさや喜びを味わい、それぞれ特有の表現や踊りを高めて交流や発表ができるようにする」（文部科学省、2009）が示されている。

文献

- 小林峻・松本富子（2012）男性教員によるダンス授業実践の成果に関する事例研究－ダンス実技研修会と授業実践の経験を通して－。日本体育学会第63回予稿集：p. 258.
- 熊谷佳代（2007）教科教育キャリアアップフィールド表現運動・ダンスの指導について－実技研修を通じた学びの展開－。教師教育研究，3：141-144.
- 松本富子・国枝たか子・畑野裕子・神戸周（1992）ダンス指導実践にかかわる現職教員の意識－選択制実施の可能性と課題について－。日本体育学会大会号，43B：p. 832.
- 松本富子・小林峻（2012）現職教員からみたダンス実技研修会の効果と課題に関する研究。日本体育学会

- 第 63 回予稿集 : p. 258.
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領 保健体育編. 東京書籍 : 東京.
- 文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領 保健体育編・体育編. 東山書房 : 東京.
- 文部科学省 (2011) 新学習指導要領 中学校保健体育【ダンス指導のためのリーフレット】.
- 村田芳子 (2009) 表現運動・ダンスの特性とその指導. 女子体育, 51 (7.8) : pp. 8-9.
- 村田芳子・高橋和子 (2009a) 「表現・創作ダンス」の内容と指導のポイント. 女子体育, 51 (7.8) : pp. 10-11.
- 村田芳子・高橋和子 (2009b) 「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の内容と指導のポイント. 女子体育, 51 (7.8) : pp. 12-13.
- 村田芳子・高橋和子 (2009c) 「フォークダンス」の内容と指導のポイント. 女子体育, 51 (7.8) : pp. 14-15.
- 村田芳子 (2012) 必修化をチャンスに, 今こそ面白いダンス授業を!. 体育科教育, 60 (2) : p. 9.
- 中村なおみ (2005) 「からだ」「あたま」「こころ」に残るダンスの授業. 体育科教育, 53 (10) : pp. 18-21.
- 中村恭子 (2009) 中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容—平成 19 年度, 20 年度, 21 年度および 24 年度の年次推移から—. (社) 日本女子体育連盟学術研究, 26 : 1-16.
- 成瀬麻美・寺山由美 (2011) 高等学校教員のダンスの授業に対する意識について—授業内容に着目して—. 舞踊教育学研究, 第 13 号 : 1-11.
- 下村和敏・山崎朱音・岡端隆 (2011) 体育授業における指導方法に関する研究 - 現代的なリズムのダンスにおける教材の再考 -. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, No. 20 : 53-63.
- 佐藤豊 (2009) 体育の新しい方向性 (今次の改訂の要点). 保健体育科教育法. 大修館書店 : 東京, pp. 4-7.
- 白旗和也 (2011) 今だからこそ確認したい新学習指導要領のポイント. 体育科教育, 59 (4) : pp. 18-21.
- 高橋和子 (2012) 創作ダンスの指導は難しくないのだが. 体育科教育, 60 (2) : p. 22.
- 寺山由美 (2007) 「表現運動」を指導する際の困難さについて—千葉県小学校教員の調査から—. 千葉大学教育学部研究紀要, 第 55 巻 : 179-185.
- 吉田茂 (2008) 運動指導のモルフォロジー. 金子明友監修. 教師のための運動学. 大修館書店 : 東京, pp. 14-24.